

帰り着ける日を、じっと待って、生き抜く覚悟を続けた。

回顧の記

埼玉県 手島 信

昭和十五年二月十一日の良き日、主人と結婚をしました。東京駅の夜行にて万歳の声に送られましたが、渡満を奨めた父は一人ただ無言。腕を組み目をつむっていました。父は文部省より教育視察に派遣され様子を知っているのです。

大連の都ホテルに一休み、目的の承德に着きました。「白蘭の歌」のロケで来られた長谷川一夫さんと野球をした時のことを主人は話してくれました。見る物、聞く物皆はじめて、日暮れになると山の彼方を見ては涙を流しました。

十六年四月三十日長男誕生、興進公司の一字を取り進一と名付けました。十七年の六月、青龍県に綿花会

社建設のため万里の長城の見える険しい山谷を越え、八時間もトラックに乗り青龍入りをしました。今の金額で数十億円もの工事でした。

主人の仕事は忙しく、省公署、県公署、国際運輸と飛行機で飛び廻りました。

二十年のある昼時、満人には内証に出征するように言われ、一人ひっそり錦州へ入営しました。八月十日長女のお誕生日の真夜中、外はいっぱいの日本の兵隊です。隊長は「お前はここに泊つてよい」と主人に言う。早朝、軍靴の紐を結んでいる主人は、「ソ連と開戦だ、今度会うとき、白木の箱かも知れない覚悟していってくれ」。私は、「死なないで、死なないで下さいね」と、つぶやきました。

八月十日に軍の家族が一番先に疎開をはじめ、私達親子も、目的地もなく少しの荷物を持ち、また帰って来るからと八月十五日に出発しました。ローソクを持った男性が「日本は全面降伏をしました」と。錦州駅に下車してたら、日本軍馬がバックパッカと所狭しと駆け廻って恐ろしいさまに言葉もないほどでした。錦

州入営の主人は、この広い満州のいずこにいるのやら、生死もわからず不安になりました。二歳の娘は両手に靴をぶら下げて激しい雨の中、傘もなくびしょぬれになって、長いみちのりをヨチヨチ歩く姿に涙が出ました。日本人小学校に難民として収容されました。毛布一枚に身を包み、不安な日々を過している時、「手島さん、ご主人が帰って来ましたよ」と叫ぶ声。「白木の箱などにならない、やっぱり帰って来てくれた」と、喜んだものの、主人をみて驚いた。手足の指の関節のお灸がただれてふくれあがっていたのです。

十月に入って寒い朝、八路軍が寝ている老婆の枕元に拳銃をつき出し、「早く出ていけ」と侵入して来た。皆学校を逃げ出した。私達は知人の物置きを借りて住みました。枯れた草根に暖をとりましたが、天井からしずくが落ちて座る所もないほどでした。この頃、長男は栄養失調で病の身となり、呼吸も脈搏もなく、看護疲れでウトウトしていると、乳房を吸われる夢をみたものでした。薄幸の中で生れたこの子を肌を抱いて暖めたけれど、寒さのために冷たくなり、短い命で昭

和二十一年一月十八日亡くなりました。食膳に座ると涙が出てどうしても食事をとることができません。

日本海は波静か。甲板上では悲しみ、苦しみを捨ててようにと歌や踊りで慰安会をしました。はるか遠くに九州の島々が見えた時は、ただ歓声とどよめき、この時の感激は一生忘れることは出来ません。佐世保海兵団に一月収容されました。秩父の実家では再会を大喜びで、お米のご飯に暖かいお風呂、祖国に親子で引揚げて来られたことを祝福されました。

姉妹から学校の先生又は会社に勤めるように奨められました。開拓に入植したいといった時は、皆は驚いて、鉛筆より重い物をもたないのにと強い反対の声でしたが、慶応に在学中機械体操で活躍し、極東オリンピックに出場、銅メダルを戴いたことがあり、腕には自信ありと張り切って入植しましたが、なかなか計算通りにいきません。二人とも生まれて初めての農業、まして開墾で土壌が野菜になじまず、種を蒔いても立消えになってしまうこともあり、また手をかけても自然が相手ということをもつて教えられました。

日本で初めての営農法とNHKにたのまれ放送もいたしました。開墾と呼ばれていた東川開拓も下安松町内にお世話になっておりましたが、住宅も増し地名を松郷と決めました。

動乱の中で友好の灯

千葉県 飯田 忠雄

鳳城県は、安奉線沿いの要衝である。私は、昭和二十年四月一日附で、この県の協和会本部事務長として赴任した。

協和会管理下の青年訓練用につくられたオンドル式の八畳ほどの部屋を私の住居とし、妻と二人の子供をよんだ。炊事場や風呂は無く、便所は訓練生用のものがあるだけであった。こんな生活でも妻は一言も不平を言わなかった。

私は、妻子を鳳城の知人もない訓練所内に置いたまま、連日、県内を巡回し、土地の古老、青年、学童を

訪ねて語り合った。満州族の呉雙祖と行動を共にした。

当時、糧穀の集荷工作は過酷を極め、その実行は、警察官を使用してなされる行き過ぎが民心に及ぼしている真実を、具体的に協和会中央本部と関東軍第四課に報告して、民心安定策の必要を訴え通した。

終戦の陛下の放送は、協和会中央本部よりの通知をうけ、これで満州国の崩壊の近いことは察知していたので、十七日に管区長、分会長、工作員の総会を講堂に招集し最後の会合を開いた。型通りの議事が終わった頃、指導班長の王春露が突然演壇に上り、今日から自分の期間、自分が神様となる。飯田事務長の万歳をするから唱和するように、と言った。

私は、だまって立ち上がり、万歳をうけ、謝辞をのべた。このあと、用意した酒食を以て宴会に入った。誰かが立ち上がって叫んだ。これから真実の民族協和ができる、と。

翌、十八日、協和会中央本部より、本日をもって満州国を解体し、協和会を解散する、との電報があった。その日の午後、住いとしていた青年訓練所より引き